

# 校長だより あおすげ

令和5年6月9日号

校長 竹内 重幸

## <印旛郡小学校陸上競技大会：体験を通して>

5月30日に成田市「重兵衛スポーツフィールド成田」を会場に、印旛郡市の代表選手が集まり、陸上競技大会が行われました。

### <入賞児童>

- 5年女子 100m 2位
- 6年男子 100m 7位
- 6年女子 100m 4位
- 5年女子 60mH 7位
- 6年女子 走幅跳 1位
- 5年女子 4×100m 3位



- 6年男子 4×100m 3位

6月の全校集会で表彰をしたところ、1年生からは、「〇〇ちゃんだ。」などと声上がり、高学年との交流がうかがえる場面がありました。あこがれの高学年になっていることが感じられました。

さて、選手になった子、なれなかった子がいます。しかし、自ら進んで練習に参加した経験や、その努力に優劣はありません。進んで参加したこと、その中で、選手に選ばれたり選ばれなかったりしたことを、どのように結果を受け止めさせるかが教育であると思います。

よく寓話の中に出てくる「コップ半分の水を、まだ半分あると考えるか、もう半分しかないと考えるか」や「1Mの長さの箸の使い方を、天国と地獄の違いの象徴とする」や「同じ町から来た人にどんな町か尋ねると、一人は、すてきな人が多い街だと答え、もう一人はとんでもない嫌な人がいる町だと答える」など、捉え方や、事実の価値付けによってその後の人生の方向性に大きな違いが出るといった教訓は、洋の東西を問わず枚挙にいとまがありません。しかし、人間は、つつい忘れがちになり、できていないからこのような寓話が多いのだと思います。

また、この考え方、捉え方は、パラリンピックでも感じた「受け入れる力」に通じるものがあるのではないかと考えます。脳卒中の後遺症で麻痺が残り車椅子生活をしている方のインタビューに「私はもう諦めました。それは、あるがままの自分を受け容れる事、つまり言い換えれば、『手放す』ことだと思います。そして、それは逃げる事ではなく『仕方ない』と気持ちをリセットすることなんだと、私は気づきました。～中略～『受け容れよう』と思うと心が楽になり、また強くなれるのです。」

我々も、完璧な状態であろうはずがありません。未熟そのものです。でも、その現状を受け入れる事ができると、不平不満が出て、文句を言ったり誰かの責任にしたりしがちです。

「体験や経験を通じた学びや、人間関係の中」で人格の形成がなされます。教育の役割は、「それらを通して成長していくことができる：成長マインドセット」の方向に導くことだと考えています。転ばずに歩けるようにはなりません。さまざまな経験を、糧にしていきたいと工夫していく営みが教育なのだと感じています。